

中経論壇

経営支援NPOクラブ
嶋津 洋二



昨年5月、サンクトペテ

ルブルグとモスクワを訪れた。妻と一緒で観光目的だが、昔訪れた時のモスクワとの違いを見るのを大きな楽しみにしていた。

ゴルバチョフ政権が倒され、エリツィンが権力を握った1991年、ロンドンでの

仕事の帰り、ビザ無しでモスクワに立ち寄ったのである。シエレメチエヴォ国際空港に着いて、入国審査官に「ビザ無しだ」というと別室に連れて行かれ、その係官に「あそこ免税店があるから、そ

こで酒とタバコを買ってこい」と言われた。なるほど「そういうことか」と納得し、高級ウイスキー2本とタバコを2カートン買って来た。

係官は上機嫌で、入国スタンプをポンと押してくれ、しかも、電話でホテルを予約してくれるほどの大サービス。その部屋には別の係官が2、3人いたが、悪びれることなく、実に堂々たる態度だった。

街中を散歩しているとき、子どもたち6、7人に囲まれ、ポケットから財布を抜き取られそうになったが、必死の力を出して振り切り、何とか逃げおおせた。通りかかりの人たちは見て見ぬふりだった。

モスクワ再訪

た。市内バスに乗ると、突然に若者2、3人がバスに乗り込んで来て、検札を始め、無賃乗車の乗客から罰金を取り始めたが、3、4番目の停留所で、逃げるように降りて行ったから、多分、バス会社の職員ではなかったのだろう。

モスクワ川畔の公園では、品の良いきれいな婦人が、屋台の商人に手持ちの衣服を売ろうとしていた。その商人は悪党面して買いたいたい

ており、かわいそうになったので、私がその衣服を買ってやろうかと思ったが、丸太棒のような腕の悪徳商人に殴られても困るので止めにした。

た。婦人は、衣服を売ったお金で食料を買うのだろうと、終戦直後の日本に思いが至った。

あれから24年、現在のモスクワはまさに様変わりでした。政治・経済システムが変わるとはこういう事なのだろう。スーパーには商品があふれており、何でも買える。

赤の広場に面した Gum 百貨店の職員ではなかった。世界中のブランド品が並んでおり、街行く人たちの表情も明るく、服装もずいぶんときれいだった。撮影禁止だった空港も今では写真を自由に撮れる。免税店の女性店員も極めて無愛想だったのが、今は普通の接客態度である。

私も経営支援NPOクラブは、中小企業の販路拡大支援以外に、自身の体験を基に、大学や高校で講演も行っているが、このような話をすると目を輝かして聞いてくれる。これからの若い人たちがネット情報だけでなく、現地に赴いて自分の目で見て肌で感じることの重要性を再認識してほしいものである。

現地を目で見て肌で感じる